

巻頭言

今こそ問われる信仰者の生き方

主よ、わたしを平和の道具に

シナピスセンター長 ^{まつうら}松浦 ^{けん}謙

ロシアのウクライナ侵攻、米国とイスラエルのイラン攻撃。世界は今、緊張度を増しています。

聖ヨハネ・パウロ2世は1981年、広島を訪れ、世界の人々に向かって平和アピールを行いました。その中で、戦争は人間の生命の破壊と死であるとして非難し、過去の過ちを振り返り、将来の責任を担うように呼びかけました。

武力・暴力によるのではなく、外交努力と対話を通して紛争を解決し、平和な世界を築くように訴えました。

教皇フランシスコも、2019年、訪日し、核兵器の保有も倫理に反すると言いつつ切りました。そして、平和への道は「思い出し、共に歩み、守る」ことであると言われました。（教皇フランシスコ「平和のための集い」でのスピーチ

2019年11月24日 於：広島平和記念公園）

それは戦争の惨劇を忘れず、平和を目指して連帯し、人間の尊厳といのちを守るように尽力することです。唯一の被爆国である日本のカトリック教会は、特別に平和のために働く使命があります。

イエス・キリストが最後の晩餐の時に、使徒たちに言われた約束を思い起こします。

「わたしは平和をあなたがたに残し、わたしの平和を与える。

わたしはこれを、世が与えるように与えるのではない」

（ヨハネ14:27）

今年の四旬節に教皇レオ14世は、全世界の教会に、平和を願い、特に政治的な指導者たちのために祈るようにビデオメッセージを送りました。主キリストの受難と死を思い起こす聖金曜日の盛式共同祈願に、次の祈りがあります。

「国を治めるすべての人のために祈りましょう。神がこの人々の知性と心を導いてくださり、まことの平和と自由が、すべての人に与えられますように」

「すべての人に平和をお与えください」という祈りは、同時にわたしたちを「平和の働き手」としてくださいという意向を含みます。平和は、人と人とがふれあい、助けあい、理解しあうことによって深められます。民族や国籍の壁を越えて、思いやりのある行動、態度、行いを通して互いを受け入れあいましょう。いのちと人間の尊厳を尊ぶ運動を促進しましょう。神様がわたしたちを和解と平和をもたらす人として用いてくださるよう祈りながら。



写真:カトリック新聞社提供

神戸地区 シナピス移動学習会

テーマ 日本の農業と食料安全危機

～今、私たちの食卓に並ぶ食べ物は、本当に安全なのか？～

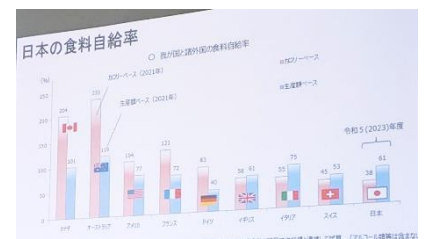


中学校教員の^{こやまひろたけ}小山博威さんを講師に迎え、東京大学の^{すずきのぶひろ}鈴木宣弘教授と神戸大学の^{ほしのぶひこ}星信彦教授の研究をもとに、食の安全についてお話していただきました。内容は日本の食料自給率の問題、輸入農産物の危険性、国産と思っても実は種子は輸入されていることもあるということ。EUなどで規制が進んでいるネオニコチノイドという強い農薬を日本は基準が緩く、まだ使用され、遺伝子組み換えのトウモロコシや大豆の輸入、また成長ホルモン剤を投入されている畜産物など、日本では基準が低いため依然として輸入されているということです。輸入に依存する背景として国家間の力関係も影響しているということでした。そしてその安い輸入によって、日本の農業の衰退に影響しているとも考えられます。私たちにできることは、国産の在来種の野菜や有機農業をしている農家から野菜を購入することで、生産者を励ますことになると小山さんは仰いました。

【参加者の感想】

- ・国産の安全性の高い食品は価格が高いことが多いため、経済的な格差で、お金がある人は安全な食品が購入できるが、そうでなければ発がん性等の危険が懸念されても輸入食品を購入せざるを得ないといった現状があり悩ましいことである。
- ・私はずっと生活クラブ生協で少し高いけど、農家畜産家を支援し、日本の生産者を大切にしています。高くてもこだわってきて良かったと改めて思いました。
- ・農薬、防腐剤に疑問があり 40 年位前から子どもの成長期には無農薬の野菜や安全な飼料で育てられた肉を各農家畜産家さんと契約を結び購入してきました。毎週宅配便で届くので調味料お菓子以外は購入しませんでした。事前の契約金や毎月の支出に多少割高感は有りましたが、季節の野菜や果物が届き買い物の回数も減るので、楽な面もありました。お話を聴いて、今はもっと大変なことになっていると感じました。
- ・日本の食料状況として船底に入れ運ばれてくる輸入品、特にトウモロコシ、小麦には除草剤が混ぜられている。また水道水の中にも PFAS 汚染が、安い牛肉には農薬まみれの飼料、成長剤が使われ体に悪影響を及ぼす。このような現実への警告を学びました。
- ・口に作る食材がほとんど遺伝子組み換えや農薬まみれであるという現実には衝撃でした。将来にわたって生命を守る政策より企業、利益優先の政

- 治。遺伝子組み換えという文字が食品から消えていたのも大企業保護のため？
- ・戦争が起こると餓死する人が 5 割と(日本で)聞き生き残るか死を選ぶか強い意志を持って選びたい。
- ・家族がアレルギー体質の為、農薬使用や輸入食材はなるべく避けています。この講演で、近年世界規模で異変が起こり、また国の理不尽な規制もあり日本の農業が衰退することを知りました。世界中に飢餓で苦しむ人が多くいますが、日本でも近い将来そうなる可能性があるというお話に心配になりました。
- ・日本の農産物は種や肥料をほとんど輸入に頼っていると聞いて、世界情勢の悪化で輸入が途絶えたらどうなるのでしょうか？若い方や子どもたちの事を思うと不安になります。国内の農業に力を入れて輸入に頼らない農産物ができるようになればいいなと思いました。
- ・それでも、食べないわけにはいかないのです。経済格差が健康をも蝕む、この現実を政治の力で変えていただきたい。



カリタスのとサポートセンターのボランティア活動に参加して

カトリック岸和田教会 おかたちずこ 岡田千寿子 いもとまちこ 井元真知子 ふくしまのりこ 福島規子

2026年2月1日 岸和田地区のシナピス移動学習会のあと、ビスカルド篤子あつこさんに能登の事をお聞きしたところ、2月26日から3月1日までボランティア活動があることを教えていただきました。

70歳代の私たちに来ることはあるのか少し不安でしたが、後日シナピス職員の大森おおもりさんから事前説明をしていただき、2月26日当日 ネリさん、サデギさん、いずちゃんと大森さん運転で出発、約7時間余りで「のとベース」に到着。オリエンテーションをしていただき、明日の活動の説明があり、近くの温泉で移動の疲れを取り、夕食を摂り、早めに就寝。



2日目 6時30分の朝の祈り、朝食を済ませ、朝礼で活動予定の説明があり、岸和田チームは森田リーダーと穴水町のワイン農家でぶどうの剪定作業のお手伝いをしました。

広大なぶどう畑で今年の収穫の為に古い蔓を取り除く作業です。長靴を履き、枝切り鋏を使い背丈より高い木もあり皆初めての作業に集中です。

静かな空間にとりの声が聞こえ、始めは無心で、次は鼻歌が出て、最後は背中も腕も苦痛でひたすらぶつぶつとお祈り、農園の人の「終わりましょう」の音が嬉しかったのに、何かまだまだやり終えていない思いを皆で話しながらベースに戻りました。

梁やなリーダーとサデギさん、大森さんは見守り戸別訪問に出かけました。活動の分かち合いでそれぞれの体験を話し合いました。今日も温泉に癒やされ身体の痛みも取れました。

夕食は近隣の方たちと「じんのび」カフェ。3歳のお子さんをご両親、お誕生日を迎えた方など7名と、9名のスタッフで美味しいスパイスカレーをいただきました。食べながら話も弾み楽しいひとときでした。

3日目、岸和田チームはベース近くの「ふらっと訪夢ほーむ」で、近くの仮設住宅に住まわれている方や近所の方が来てくれるカフェのお手伝いをしました。

梁リーダーが前は3人しか参加が無かったと話されていたので心配していたら、小雨の降る中次々と16名の参加者が来られ、コーヒー、紅茶などおかわりしながら私たちに今までの事や仮設住宅での困りごとなど色々話して下さいました。

その中で90歳のゆりこさんはわら草履を作るのが得意で今度教えて下さるそうです。85歳の和子かずこさんは輪島塗の仕事を再開してプレハブで作業をしているそうです。

日頃話せなかった事もたくさんお聞きして無事終わりました。

その後は、近くの仮設住宅に来月のカフェのちらしをポスティングして、お宮カフェに行き森田リーダーの班と合流。お客様が少なかったため、ボランティア活動で来ていた金沢大学と東洋大学の学生さんと分かち合い。

4日目、最終日は七尾教会へ移動し、ミサ後毎週開かれているカフェをお手伝いして、昼過ぎに七尾を出発し、無事大阪に戻りました。

私たちが活動の足でまといにならないかと思いましたが、出来ることを見つけに機会があればまた参加したいと思います。

この度お会いした皆様ありがとうございました！



のと ボランティア報告

事務局 おおもり ゆうじ 大森 雄二

のとボランティアにはこれまで、仮放免の難民申請者たちを中心に参加して、家財の片づけなどの依頼された作業を黙々とこなす、作業系と呼ばれる活動をしてきました。七尾市での公費解体が昨年12月に終了する流れの中、つながりのできた被災者宅への定期的な見守り訪問や、集会所などを利用したカフェへと活動は移行し、被災者と対面する場面が増えてきました。

今回、岸和田教会から3名の明るい高齢者が参加されました。ブドウ畑での作業はだいぶしんどかったようですが、おいしい夕食と輪島ベース近くの素晴らしい温泉の助けで、無事に3日間を完走されました。

往復の道中で一番元気だったのがこの3名で、私もハンドルを握りながら笑いをこらえられない場面がたびたびありました。

雪に埋まる山奥で独居する合田さん(80代前半)は、この冬初めて仮設住宅に入りました。昨年秋には「仮設は嫌だ」とこぼしていましたが、訪ねてみると、街での暮らしもまんざらでもない様子。毎日届く新聞(自宅では週に1回)や図書館から借りた雑誌を読み、数日後に迫った県知事選や高市総理について、しっかり語る姿にほっとしました。サデギさんが前日の晩から準備したイランの郷土料理を、ベッドの脇の丸いテーブルに並べて皆でいただきました。



「優しい心がうれしいよ。でも、イランに残した家族のことが心配でたまらんでしょ。(のとまで来てボランティアなんかしてないで)早く家族の元に帰れたら良いのにね」「本当に苦勞したことや悲しいことは、簡単に口にできるものではないよ」合田さんの優しい気持ちと、心の奥に秘めた想いを想像させられる言葉が印象に残りました。

初めて参加した見守り訪問では、ほかに6名の方を訪ねました。部屋まであげてもらえた方は少なかったですが、玄関から垣間見える暮らしや立ち話から感じたのは、一人ひとり違うということ。デイサービスに行ったお連れ合いの帰りを待つおばあさんは、座っているのも会話するのもしんどそうな様子。玄関に手作りのお節句の飾りを並べ、春から公民館で始まる体を動かす簡単な遊びを楽しみに



手作りのお節句の飾り

待つおばあさん。前回、畑でお会いた中谷さんは、きれいな髪をなびかせて「いつも留守ばかりでごめんね」と元気に忙しくしている様子。愛犬の散歩からパート先の友だちと戻ってきた女性は、金沢での映画鑑賞と九州旅行の計画で忙しそう。二人の会話はまさに大阪のおばちゃん漫才。女性たちと違い、口数の少ない男性お二人の所在なさが妙に心にひっかかる訪問でした。

カフェは、初めて会う被災者を目の前にして会話を始めます。天気の話のあとが続かない自分の雑談力のなさを痛感しました。今回のボランティアの中には、被災者に自分の悩みを聞いてもらい、逆に励まされた者がいました。傾聴ボランティアという言葉は知っていましたが、それがどんなに難しいことか、被災者を前に思いしらされました。まずはもう少し雑談力をあげて、これからものとへ通い続けたいと思います。



フクシマ 訪問



事務局 おおもり ゆうじ
大森 雄二

3月15日から2日間、大学院生のじん しゅうり金重季さんとフクシマを訪問してきました。

最初に東日本大震災・原子力災害伝承館に行きました。お話を聴かせてくれた語り部さんが南相馬へ帰ると伺い、後ろに付いて走らせてもらおうと、途中数か所で車を止めて、襲ってくる津波と逃げる人々の話をまさに現場で指を差しながら説明してくださいました。いのちの瀬戸際の話は心に迫るものでした。

午後は、カトリック原町教会で「いのちの光3・15 フクシマ」の現地報告に参加しました。なぜ3・15なのか？ この日、東京電力福島第一原子力発電所は3度目の爆発を起こし、チェルノブイリ原発事故に続く深刻な原発事故を決定づけた日だからです。

講師のたなか とくぐん田中徳雲さん(南相馬市みなみそうまし曹洞宗同慶寺住職)は震災後、福井県のえいへいじ永平寺まで家族や檀家さん連れて避難され、以後数十回にわたって往復800キロの道を行き来して、住民の避難と帰還を助けてきました。祖父母と別れて福井へ避難する時に泣いた未っ子に、フクシマへ帰還する時には福井の友だちと別れるのが悲しくて泣かれたことが辛かったと親の思いを聴かせてくれました。「いのちと平和を大切にしたい、それだけなのです」と優しいお顔で静かに熱く語る徳雲さんは、昨年、南相馬九条の会の代表を引き継ぎました。「戦争が止まらないこんな時代だからこそ、しなやかに繋がっていきましょう」との呼びかけには、聞く者を鎮かせる力がありました。



16日の朝、南相馬市かしまく鹿島区の海岸で祈りの時を持ってから、写真家のなかすじ しゅん中筋純さんが主宰する「おれたちの伝承館」を訪ねました。伝えるべきことは何かという視点をはっきり持った、手作りの温もりの感じられる伝承館でした。

最後に、東京電力廃炉資料館を見学しました。謝罪や反省の言葉を繰り返し聞かされるほど、どこか醒めていく自分を感じました。ロボットアームを用いて耳かき1さじほどのデブリを取り出せたことを長々と解説して、「廃炉プロセスの希望です」とまとめられた時には、私たちはもう一度騙されるかもしれないという恐怖を覚えました。

カリタス南相馬では、スタッフの皆さんと夕食を共にさせていただきました。おたかく小高区に通い続けるシスターたちは、「ただそこにいることだけで住民から感謝されている」と語りました。ねもとまり根本摩利所長は、水俣病の被害者が新潟水俣病が発生した時に、「もっと私たちが声を出して伝えていれば」と後悔した話を教訓に、「放射能汚染されたこの土地から、声を出す必要を感じています」と語りました。こうだかずお幸田和生司教さんをはじめとして、肩肘を張らずにこの地で人びとに寄り添おうとするスタッフたちの言葉と姿が印象に残りました。

整地された空き地と太陽光パネルばかりが並んだ農地が広がる光景や、ドローンのテスト飛行場が広大な敷地を占める光景を見ただけでは、戻ってきた人びとが何を思い願って暮らしているのか、想像すらできないことがわかった2日間でした。

おれたちの伝承館で『あした苦難の日々を心に刻み、再生へ向かって歩む一明日は必ず来る おたかく原発被災地小高』
小高夏期自由大学事務局【編著】(ヨベル出版)』という本を見つけました。被災者であるひろはたゆうこ廣畑裕子さんの言葉(P26～)が心を揺さぶります。書店には並んでいないかもしれませんが、ぜひ探してみてください。

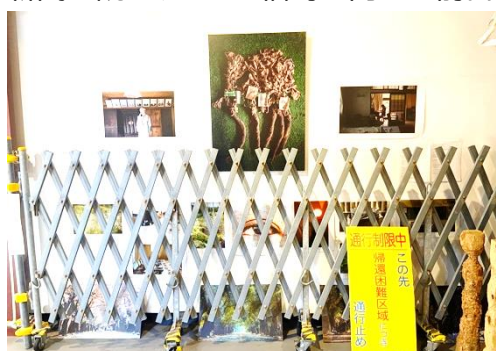


フクシマ・フィールドワークに参加して

大学院生 じん じゅうり
金 重李

日本に来て 9 年目、東日本大震災から 15 年となる 2026 年 3 月 15 日、私は初めて福島を訪れました。当時を振り返ると、2011 年 3 月 11 日の震災時、私はまだ小学生で、日本にも来ておらず、将来日本に留学することも考えていませんでした。テレビや周囲の大人たちを通じて震災のことを断片的に知っていたものの、それはどこか遠い出来事であり、自分の生活と結びつくものではありませんでした。来日後も福島に関する話題に触れることはありましたが、深く考える機会は少なく、次第に過去の出来事として受け止めるようになっていました。

しかし今回の訪問を通じて、震災は決して終わった出来事ではないと実感しました。事前に資料や新聞を読み、さらに福島へ向かう前日の夜、大森さんの実家で関連特集のテレビを見ました。番組では、震災と原発事故によって故郷を失い、15 年以上帰ることのできない人々の生活が描かれていました。その背景には、原発事故による「帰還困難区域」がいまなお存在し続けている現実があります。実際に現地へ向かう途中でも、ナビが示すルートが通行止めになっており、幹線道路しか使えない場面に何度も遭遇しました。こうした経験から、震災の影響が現在も生活の中に残り続けていることを強く感じました。



「おれたちの伝承館」の一角

2 日目には、震災遺構である浪江町立請戸なみえ うけど小学校を訪れました。建物には当時の被害がそのまま残されており、時間が止まったかのような静けさがありました。体育館には卒業式のための横断幕が掲げられたままで、震災当日に卒業式を迎えようとしていた子どもたちの思いがそのまま残っているように感じられました。

一方で、壊れた床や壁の傷跡は、津波の激しさと、その後 15 年間という長い時間の経過を同時に物語っていました。自然災害の力と、その痕跡が消えずに残り続ける現実を目の当たりにし、強い衝撃を受けました。また、この小学校の児童が全員無事に避難できたという事実は、大きな救いとして心に残りました。

さらに、校舎 2 階の教室に置かれたテレビでは、当時の児童たちが現在の東京での生活について語る映像が流れていました。

彼らは今も「避難者」と呼ばれる存在なのか、それとも新しい土地に根づいた生活者なのか、簡単には答えの出ない問いが浮かびました。



請戸小学校の体育館

15 年という時間は、彼らにとって人生の大半を福島以外の場所で過ごしてきたことを意味します。戻れない故郷と新しい生活の間で揺れる姿は、日本で長く生活してきた自分自身の経験とも重なり深く心に残りました。



戦争に巻き込まれる船員の現実

～ 子ども時代の体験から思うこと ～

フリーライター

おおもと あさみ
大元 麻美



イスラエルとアメリカが、国際法に違反する形でイラン攻撃を始めて1カ月が経つ。

その報復として、イラン革命防衛隊は、ホルムズ海峡を事実上封鎖し、多くの機雷をまいたと主張している。

この戦争によって、何の責任もない人びとや子どもたちが犠牲になっている。また、たまたまホルムズ海峡を航行していた他国のタンカーやコンテナ船も戦禍に巻き込まれるという悲劇が起きている。報道によれば、既に船員に死傷者も出ている状況だ。

このニュースを聞くやいなや、私の中学時代の記憶がよみがえってきた。

現在、ホルムズ海峡に閉じ込められている船員とその家族のことを理解する一助になればと思い、今回は自分の体験をつづることにする。

《 船員家族の苦しみ 》

24 年前に 73 歳で亡くなった父は、かつて日本郵船の社員で、コンテナ船の船長を務めていた。

私が物心ついた頃から、父は欧米やアフリカなどへの航海でその都度、1カ月から約3カ月も家を留守にした。実質的に私たちの日常は、母しかない「ひとり親家庭」だった。

留守を任された母にとっての毎日は、苦勞と苦惱と苦難の連続だった。親戚や近所からは「夫が留守だ」ということで“半人前”扱いされる屈辱を受けた。夫に相談できないまま一人で子どもを育て、あらゆる物事について決断を迫られる重責を負った。こうした妻への過重なストレス、またこの「特殊な仕事形態」が家族に及ぼす影響は計り知れない。

そうした船員家族の私たちにとって、忘れられ

ない事件がある。イラン・イラク戦争(1980—88年)の勃発である。

《 他国の戦争に巻き込まれる 》

1980 年9月 21 日、父が船長を務めるコンテナ船「箱崎丸」はホルムズ海峡で、イラク・ウムカッスル港に入る順番待ちをしていた。そして翌 22 日、箱崎船が入港したまさにその時に、イラン・イラク戦争が始まったのである。

船舶は「国連の旗を掲げていれば爆撃を受けない」というルールがあるらしいが、あらゆる船が国連旗を常備しているわけではなく、箱崎丸はミサイルを被弾し損傷した。その後、港内に留め置かれ、それから約半年間、乗組員が帰国することはかなわなかった。

在イラク日本大使館の職員が一人、たった一度だけ船の様子を見に来たというが、それを最後に大使館員はイラクから退避した。

乗組員を助けてくれる者は誰もいない。砲撃音が間近に迫る異国の港で、船員たちは自力で身を守るしかなかった。危険を承知で港から陸路で食料の調達に走るなど、船員たちも父も大変だった。そして、日本で心配している船員の家族も大変だったのである。

NHKのニュースの中で、誤報だったのであるが、「大元船長、死亡」という報道が顔写真付きで流れ、私は事情がのみ込めずにいた。母の記憶によれば、それは死亡のニュースではなく、「イラン・イラク戦争に巻き込まれた」という報道だったという。

数日後、乗組員家族への説明会が日本郵船の横浜支社で開かれ、家族たちが集まったが、やがて不安の矛先と責任の所在を求める強い思いは、

戦争当事国ではなく、また会社でもなく、船長である父にも向けられるようになった。

《 船員家族への2次被害 》

乗組員の妻から直接、わが家に電話が入るようになり、「夫を早く日本に帰してほしい」「船長は何をしているのか」という非難と懇願が繰り返され、戦争とは全く関係のない、被害者家族の一員であるはずの母が2次被害者となった。

苦しんだ母は、夫の安否を案じることよりも、二十余人の乗組員とその家族を含む百人余りのことを気に病んでいた。「もしものこと」があれば、その時には喪服を着て、乗組員の家族を訪ねて“謝罪の行脚”をしなければならないと覚悟を決めていたという。

そして、乗組員全員が無事に帰国することを切に願うとともに、夫に「もしものこと」があったら、どうやって2人の子ども(当時私は中学生、姉は大学生)を育てていけばよいのかと苦悩した。やがて母は食事がのどを通らなくなり、顔は湿疹しっしんで腫れあがり、胃腸の動きが止まり、半病人となった。

テレビニュースを見た親戚はといえば、「もしものこと」があったら、私たち家族の経済的負担が自分たちにのしかかるかもしれないと恐れ、火の粉が飛んでこないように、わざわざ電話をかけてきて「応召したと思え」と母を冷たく突き放した。そんな苦しみの時、母を「どん底」から立ち上がらせたのは「神が与えた試練」という言葉だったという。

《 助け合いと誹謗中傷 》

父が乗船していた箱崎丸には、当時としては珍しいマリンスット(通信システム)が搭載されていた。

父は毎日2回(午前と午後)、会社とやり取りを続けた。また他の外国船が本国と連絡が取れるようにマリンスットを使用させ、助け合ったという。

そして父は、乗組員に対してもマリンスットを使

って家族に連絡することを許したものの、自分がわが家に電話をしてくることは決してなかった。母は会社からの連絡で現地の情報を知るしかなかった。

結局、開戦から3カ月後、船長の父一人を残して乗組員は全員帰国。別の乗組員が交代要員としてイラク・ウムカッスル港に到着。母は、自分にできることとして交代要員の家族を訪ね、慰めた。

そして翌年の2月(開戦5カ月後)、父は飛行機で無事に帰国したのだが、今度は著名な月刊誌が、船長である父へのバッシング記事を掲載。自称ノンフィクションライターが書いた事実に基づかないフィクション記事による誹謗中傷が出回り、私たち家族はひどく傷つけられた。戦争がもたらす様々な予測できない不幸を体験することになったのである。

《 国境を超えても命が守られる世界に 》

国境を超えるということには必ず危険が伴う。

どんなことが身の回りで起こるか分からないのだ。自分を守ってくれる国や地域を出ていくことが、命の危機に直結しないように、民族・文化の違いを超えた人間同士の連帯と平和の構築を切に願う。

そしてもし、留守を任せられ孤立しているような乗組員の家族が身近にいたら、彼らの命を支え、励ましてほしい。資源がなく、輸入に頼らざるを得ない日本の“命綱”となって働く船員たちの仕事は、国内に暮らす人々のかけがえのない命を支えている。

戦争の陰に隠れて見えにくい存在だが、さまざまな“不幸”に立ち向かって、現場で闘っている人々に思いをさせていただければ、と思う。



そして「国際問題は、戦争では解決できない」と言う母の切なる思いをあらためてここに強調しておきたい。

私たちは決して諦めないーイラン騒乱の中でもガザは世界に呼びかける

シナピス運営委員 にしくち のぶゆき
西口 信幸

希望はわたしたちを欺くことはありません。

ローマの信徒への手紙 5:5より



この2年半、「ガザ」が生死をかけて訴えてきたものは何だったのか。イランの大惨事は突然起きたものではありません。植民地パレスチナを1世紀にわたり放置し、子どもの大量虐殺、飢餓を見ても、国連で定めた人権社会よりイスラエルとの安定経済を望んだ国際社会の「選択」の結果です。シオニズムの植民地的な破壊をイスラエル自身は止められません。

被爆直後のヒロシマのように、生きるために必要な「全て」を失い、10月の「停戦」によってガザはイエローラインという壁の中に閉ざされ、孤立無縁です。「トランプの平和」によって12月に国連、NGOを締め出し、ガザを外界と完全に断つという「自然消滅」を最終策として決定し、3月の実施に合わせて、次のステップ、イラン攻撃を開始しました。



不滅のガザ：スモードの魂

イラン戦争を口実にしたガザの再封鎖

ラファ検問所の再封鎖、重症者の足止めが続く。食料、医薬品、復興物資搬入の大幅な削減、燃料が阻止され、子どもの飢餓、そして絶望的な医療、教育

平和評議会の停滞（静かなジェノサイドの隠れ蓑）

「イエローライン」近くでは銃撃、ギャングの襲撃

完全に破壊されたガザ…それでも諦めないラマダン

わずかな配給に群がる子どもたち、そして居住不可能な家に暮らす家族が、質素なイフタル（断食明けの食事）を準備する。静寂と痛みにも埋もれた瓦礫の中で断食と祈り、イフタルを貧しく、静かに捧げます。この光景はガザの不屈の精神と結束を映し出します。

「民なき土地に、土地なき民を」

パレスチナ：シオニズムの完成

1918年バルフォア宣言でシオニズム国家建設を目指して計画的、組織的に国土を100年間、奪ってきました。盟友トランプと共に、ガザの殲滅、西岸の併合が目前に迫っています。

レバノン：第二のガザ

イラン攻撃の混乱に隠れた次の目標

大イスラエル構想を示すネタニエフ：

「ナイル川からユーフラテス川まで、『安全保障上の支配』は世代を超えた歴史的かつ精神的な使命である。」

シオニズムによる植民地支配は西洋社会の「原罪」です。「力による平和」への沈黙、「中立」は強者への恭順です。真の平和のため、死に至るまで「非暴力」を貫かれた十字架上のイエスに倣い、「希望」を持って、聴き、祈り、声を出すことが求められているのではないのでしょうか。

2年間、毎月のガザの動きをお伝えしてきましたが、「静かな民族浄化」となり、イラン戦争によって声も届きにくくなりました。今後はテーマを決めて、ガザをお伝えするようにします。

教区聴覚障がい者ボランティア会 おかもと はる え 岡本 ハルエ

教皇フランシスコがすすめられたように、シノドスに倣ってささやかな分かち合いをさせてください。私はカトリック教会で手話通訳をしています。月に2回青少年センターで行われる聴覚障がい者(ろう者)の牧師による聖書学習に参加しています。私の所属する教会のろう者も、勤務の都合が良いときは、参加して学んでいます。よく分かると喜んでおられます。

聖書講座は、新共同訳聖書を複数のろう牧師がビデオに編集されているものを使います。私が参加しているグループは、10名位で、ろう牧師、信者、未信者、若干名の健聴者です。

直に手話で牧師の解説があるので、健聴者でも理解困難な聖書の箇所を、ろう者はスムーズに理解されていると思います。

ビデオの字幕解説だけでは足りないけど、ろう牧師のフォローが素晴らしいです。手話でやりとりしながら進んでいく様を拝見している感動します。

健聴者のコミュニケーション方法は会話ですが、聴覚障がい者は、お互いが顔を合わせて手話を見て会話をします。健聴者は、仲が悪くなると背を向けても会話は成立しますが、手話は必ず向きあいます。だから、自然と触れ合い親しくなります。手話は、素晴らしい神様からの贈り物です。

聴覚障がい者ボランティア会も、この聖書をビデオで毎回学習しています。聖書ビデオは、携帯でも見るができます。

教会共同体として、また社会の中で私たちが一致に向かう良き交わりができますように…
アーメン。

☆すべての教会に、聴覚障がい者がいつ来られても良いように、手話通訳者がおられたら良いですね。

聴覚障がい者ボランティア会

聖書の手話表現の学び

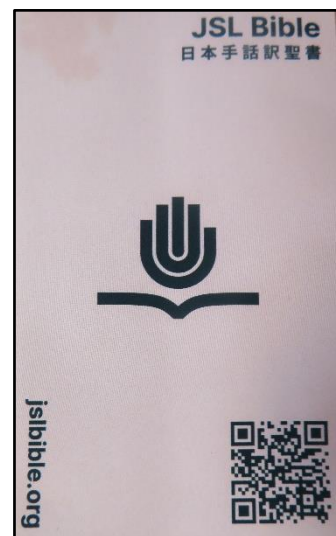
教区活動の手話通訳者派遣

第 1・3・5(水)10:00~14:00 姫里集会所

問い合わせ 障がい者委員会 dis@ostk.catholic.jp

☆手話に興味ある方は、お近くの市役所にお問合せください。

地域には、手話講習会、手話サークルなどあります。





ことばを紡ぐ～言葉で遊ぶ

ペンネーム「旅する象」

★俳句の季語ってどんなものがあるの？(春の季語篇)

俳句の基本は、有季定型(五七五の中に季語を含む)ですが、その季語と言われるものにはどんな言葉があるのでしょうか。

誰でも知っている季語も多いのですが、「これどういう意味？」と首を傾げたくなる季語もかなり存在します。このコラムが掲載されているシナピスニュースは4月号ですが、今月の最も分かりやすい季語は【四月】です。

歳時記によると『春たけなわの月、花が咲き、新学期が始まる』とあります。例句としては【椅子ひとつ減らす人事も四月かな】(谷 いくこ)が紹介されています。

春は人事の季節でもありますね。

【目借時】(めかりどき)という季語があります。晩春、蛙の声を聞いて眠くて堪らなくなる頃をいう時候の季語です。例句として【呼び掛けに欠伸で返す目借時】(旅する象)を挙げておきます。お弁当を食べた後の午後は眠くなりますよね。



ちょっと変わったところでは、地域限定、日にちも限定の季語というものもあります。

【貝寄風】(かいよせ)という季語です。歳時記によると『陰暦2月22日頃、大阪湾に吹く西風のこと。この風により吹き寄せられた貝殻で、四天王寺の^{しょうりょうえ}聖霊会の造花を作ったという故事に基づいたもの』だそうです。

例句を挙げると【貝寄風や鷗群れみる流れ船】(高田 ^{たかた} 蝶衣 ^{ちやうい})という句があります。意外な所の縁で定着した季語なのだなあと感心しました。

春の趣を感じる季語としては【山笑う】というものがあります。春の訪れとともに山一面に芽吹き始めた木々や草の色合いが遠くから眺めて美しい様を言う季語です。

例句として【故郷やどちらを見ても山笑う】(正岡 子規)があります。

春の到来を歓ぶ美しい季語ですね。

最後は、えーこれも季語なのという変わり種を紹介しておきます。

【四月馬鹿】いわゆるエイプリルフールのことですね。万愚節(ばんぐせつ)とも言います。この日は相手をおかしくしたり驚かせたりしても咎められないという西洋の風習から季語になったものです。あまり趣味の良い風習ではありませんね。例句として、皮肉を込めて私が作った句を載せてコラムを締めたいと思います。

【万愚節世界は平和に満ちている】 おしまい

事務局こぼれ話

まつうら
松浦ビスカルド 篤子

3月20日 早朝、身柄引き受けに警察へ

今日は知り合いの娘さんの結婚式。はりきって早寝していたら、早朝にI警察署から電話がかかってきました。「レザ(仮名)さんを御存知ですか。」

警察によると、昨夜不審者を職務質問したところ、たまたま現場にいたレザさんも連行し事情聴取をしたが、レザさんは何の容疑もない人だったので釈放する、ついては彼の身柄引き受けに署まで来てほしい、という話でした。確かに日本に身寄りのないレザさんを迎えに行けるのは私しかいません。警察官は「実は午前2時に釈放したかったのですが、レザさんがこんな真夜中に松浦さんに電話などせず朝まで待ってくれ、と強く要望しまして」と言っていました。私は支度をしてI署へ向かいました。

ロビーで待つこと15分。私は受付に「時間かかるんですか」と尋ねました。警察官は眉をしかめて「かかりますね」と即答。「それは困ります。私は今から結婚式に行かないといけなんです。早くしてください」と言うと、彼らは奥へ行き、ほどなくして私を生活安全課に通しました。部屋に入ると警察官たちが一斉に私に目をやり、私は妙な威圧感を覚えました。小さな取調室の戸口へ促され、警察官がそっと隠し窓を開けて「レザさんに間違いないですか」と私に彼

の姿を見せて確認しました。後は簡単な書類の手続きです。警察官が私の身分証をコピーしようとしたので、私は「コピーせず手書きで番号を控えてください」と言いました。今度は黒の朱肉を出して私の指紋を取ろうとしたので「印鑑あるから」と断りました。私は「身柄引き受け人には出頭時に身分証と印鑑が必要だと予め指示すべきだ」と苦言を呈しておきました。最後に「ビスカルド篤子」と署名すると、これにて手続き終了。私はレザさんに会わずに先に帰ることができました。

帰宅してひと息ついていたら、息子が「お母さん警察行つとったん？」と尋ねてきました。「今、警察官から電話があつて、大事な結婚式の時にすみませんでしたと謝つたで」。コーヒを吹き出しそうになり咳き込んでいると、何とレザさんを取り調べた人は息子の友人だったそうです。レザさんから「マツウラ」と聞いていたが書類を見て「ビスの母さん」だとわかり電話をしてきたというわけでした。「世間は狭いねえ」という私に、「結婚式あるからガラ受けハヨしてっていう人、あんまおらんのちゃう」と息子。いや、そこ大事でしょう。「用事ある」だけでは動きません。結婚式だからでしたよ、結婚式！！

3月21日 御堂筋線での放送事故

仕事で地下鉄に乗っていました。さすが御堂筋線、土曜の朝でもそこそこ混んでいました。駅に入ると若い声のアナウンスが響きました。と、この車掌さん、何か可笑しなものでも見たのか「天王寺～天王寺～ワハハ」と笑い声まで流れたではありませんか。途端に車内は大爆笑。知らぬ人どうし顔を合わせて笑いました。電車の中が笑いの渦になる現象など出くわしたことはありませんでした。

笑う門には福来たる、の言葉にピッタリでした。



2026年平和月間・旬間「共通テーマ」が決まりました！

「私は平和の道具 I am an Instrument of Peace

～思い出し・ともに歩み・守る Remembering, Walking Together, and Protecting～

*企画について、お悩みや相談ごとがありましたら、お気軽に事務局までお問合せください。
よろこんで協力させていただきます。
あきらめの誘惑に負けないように力を合わせていきましょう。



引き続き、
活動へのご支援ご協力を
よろしくお願いたします。

お米、カップ麺、日持ちのする
食料品、のご寄付をお願いします



シナピスホームカフェ お休みの お知らせ



いつもシナピスカフェに訪問してくださり、
ありがとうございます。
諸事情により、カフェの開催をしばらく
おやすみすることになりました。
カフェを可愛がっていただいているみなさまには
ご不便をおかけいたします。
再開時期は未定ですが、またお知らせいたします。
2026年3月19日 シナピスホーム

「ニュースレター配布停止」、「点訳版の郵送」をご希望の
方はシナピスにご連絡ください。☎06-6942-1784

*4月の祈り「復活の光」は、
司教団メッセージ「『2026年性虐待被害者のための
祈りと償いの日』にあたって」の裏面に掲載されています。

あとがき

先日、夜の9時頃、シナピスホームから少し北にあがったあたりから桃谷駅へと歩いていて、迷子になりました。方向感覚に絶対の自信がある私は、ありえない事態にうろたえました。スマホで地図を開いても打開策が見えず、宅配時代の動物的勘がたった1年で錆びれたかと落ち込みました。観念して、道行く人に尋ねることにしました。自転車に乗った1人目の方には、スピードを上げて去っていかれました。2人目の方も自転車でしたが、「わかりやすい所まで案内します」と自転車を止めて一緒に並んで歩いてくれました。関東弁の初老の男を憐れに思ってくれたのでしょうか。優しさが沁みる出来事でした。
「どうしてそこまでしてくれるのですか」と聞きたくて仕方なかったのは、私ならそこまでしない＝私の中の「自分ファースト」に気づかされたからだと思います。目の前の人のために動けず、見えなくされた人、国境を越えた人のために動けるわけがない。「他人ファースト」の洗礼を受けた私たちの行動が、今ほど問われている時はないと自戒を込めて思います。(ゆ)

▽▲▽ シナピスの主な活動 ▽▲▽

- ◆広報活動
 - ・教皇メッセージ、司教団メッセージ等社会活動の指針の伝達
 - ・読者と教会内外の社会活動をつなぐ機関誌としてシナピスニュースを発行
- ◆大阪高松教区・社会活動委員会との連携
- ◆学習会研修会の企画
- ◆こども基金
 - 世界・日本のこどもたちへの援助
- ◆日本カトリック司教協議会との連携
- ◆人権教育の講師を務めるなど教育機関への働きかけ
- ◆難民移住移動者支援
 - 難民移住移動者の暮らしやすい社会を目指して
 - 難民移住移動者 相談ダイヤル
 - ☎ 06-6941-4999

アクセス

〒540-0004 大阪市中央区玉造 2-24-22
カトリック大阪高松大司教区事務局内



- 公共交通機関ご利用の場合
 - JR 森ノ宮駅より 約 1000m
 - 地下鉄中央線森ノ宮 2 番出口より 約 800m
 - JR 玉造駅より 約 1000m
 - 地下鉄長堀鶴見緑地線玉造 1 番出口より約 800m
- 車でお越しの場合
 - 阪神高速 13号東大阪線法円坂出口
 - 法円坂交差点南へ上町を東へ

活動へのご支援ご協力をおねがいします

- ☐郵便振替 00960-7-61419
 - 加入者名 カトリック大阪高松大司教区
 - 代表役員 前田万葉
- ☐三井住友銀行 玉造支店 普通 9401958
 - カトリック大阪高松大司教区 シナピス
 - 代表役員 前田万葉
- ☐オンラインはこちら →→→

